

石山寺蔵 靖邁撰 『仏地経論疏』 研究序説

長谷川 岳史
小野嶋 祥雄
吉村 上明
田上 慈順
順也

Introductory Research on Jingmai's *Fodijinglunshu* preserved in the Ishiyama Temple

Hasegawa Takeshi

Murakami Akiya

Onoshima Sachio

Yoshida Jijun

Jingmai (Dates Unknown), who participated in the translation committees of Xuanzang (602–664), is said to have written many works, yet currently almost all have been lost. The *Fodijinglunshu* is one of those works, but in 1924 Tokujyo Ooya reported that fascicles one, two and six of an early Heian manuscript remain in Ishiyama Temple.

In 2019, research associates Takeshi Hasegawa, Akiya Murakami, Sachio Onoshima, and Jijun Yoshida of Ryukoku University's Research Center for World Buddhist Cultures undertook research to publish the remaining fascicles of Jingmai's *Fodijinglunshu* and presented the following results.

- Research on Jingmai's *Fodijinglunshu* (Commentary on the *Fodijinglun*) of Ishiyama-dera: A Reprint of Fascicle One, *The Studies In Buddhism*, vol. 76, 2020
- Research on Jingmai's *Fodijinglunshu* (Commentary on the *Fodijinglun*) of Ishiyama-dera: A Reprint of Fascicles Two and Six, *Bulletin of Research Center for World Buddhist Cultures*, vol. 60, 2022

Based on this research, this paper will examine the following four points of what can be clarified as unique doctrinal characteristics seen in Jingmai's *Fodijinglunshu*.

1. The Buddhist texts cited in the *Fodijinglunshu*.
2. Jingmai's scholastic lineage and the *Fodijinglunshu* among Xuanzang's disciples.
3. The Buddhist Logic applied in the *Fodijinglunshu*.
4. Considerations of the phrase "The Tripitaka Master said" seen in the *Fodijinglunshu*.

石山寺蔵 靖邁撰 『仏地経論疏』 研究序説

長谷川 岳史 村上 明也
小野嶋 祥雄 吉田 慈順

『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』において九人の綴文大徳の一人にあげられ、他にも『瑜伽師地論』の証文や『成唯識論』の質文を玄奘(六〇二―六六四)指揮下で担当した靖邁には、数多くの著作があったことが伝えられるものの、現在ではそのほとんどが散逸したと考えられている。

『仏地経論疏』もその一つであるが、巻一・二・六については、一九二四年に大屋徳城氏が『石山写経選』(便利堂)において、法宝『一乗仏性究竟論』と共に「学界に報告す可き二種の逸書」として紹介している。また、石山寺文化財総合調査団も一九七八年の『石山寺の研究 一切経篇』(法蔵館)と一九八五年の『石山寺古経聚英』(法蔵館)において、「石山寺一切経」(附第六函「第一六〇号(巻一)・第一六一号(巻二)・第一六二号(巻六)」に平安時代初期の写本が現存することを報告している。

本論文では、日本古写経研究所 令和四年度第一回公開研究会(令和四年五月十四日、国際仏教学大学院大学春日講堂)における発表「石山寺蔵靖邁撰『仏地経論疏』について―巻一・二・六の翻刻研究から見えてきたこと―」をもとに、龍谷大学世界仏教文化研究センターの大蔵経研究プロジェクト「中国仏教教学の研究」の構成員(長谷川・小野嶋・村上・吉田)が、二〇一九年から

ら取り組んだ成果を報告する。

なお、『仏地経論疏』巻一・二・六の翻刻に至った経緯や翻刻文は以下において公表され、現在出版の準備をしている。そのため本論文で『仏地経論疏』を引用する際は、以下の論文において各巻ごとに付した「行番号」を用い、引用に際しては論文に付した「後註」の推定文字などの情報を踏まえて適宜修正している。

- ・石山寺蔵 靖邁撰『仏地経論疏』の研究―巻一の翻刻―
(『仏教学研究』七六、二〇二〇年。以下、長谷川ほか「二〇二〇」)
- ・石山寺蔵 靖邁撰『仏地経論疏』の研究―巻二・巻六の翻刻―
(『世界仏教文化研究論叢』六〇、二〇二二年。以下、長谷川ほか「二〇二二」)

一 『仏地経論疏』の引用仏典

1 はじめに

近時、『仏地経論疏』巻一・二・六の全文が学界に紹介されたわけである

が、本疏に関する研究を今一歩前進させようとする際には、引用仏典はもちろんのこと、成立年時や思想的特徴などの解明に挑まねばならない。そこで本稿では、『仏地経論疏』巻一・二・六に引用される仏典をすべて紹介し、そのなかでも巻一の「無垢称経」について検討を加えることで、本疏の成立年時を考える上での一助としたい。

2 『仏地経論疏』に引用される仏典

【凡例】

・「巻数」「行番号」

「巻数」「行番号」は、長谷川ほか「二〇二〇」「二〇二二」の翻刻文にしたがう。

「行番号」は、仏典の名称が出ている部分に限る。したがって、引用される仏典の本文は「行番号」の範囲に含めない。

・「仏典名」

『仏地経論疏』の本文から抽出する。抽出の際は、長谷川ほか「二〇二〇」「二〇二二」に示される「後註」の推定文字などの情報を踏まえた。

仏典名を明示しないものの、仏典からの引用が明らかな場合は、空欄にした上で「出拠」に情報を記した。

仏典名ではなく、品名などが掲げられている場合はそれを示した。

・「出拠」

引用文が判明する場合に限る。例えば、『撰大乘論』の初めにも亦た三乗の僧に帰することあり（長谷川ほか「二〇二〇」の65a）など、引

用文がはっきりしない場合は空欄にしている。

引用が『仏地経論』の本文からの場合は空欄にした。

出拠が特定できない場合は「不明」と書き記して、脚注に当該箇所本文を示した。補足が必要な場合も脚注にて情報を記した。

『大般涅槃経』については北本にしたがった。『大方広仏華嚴経』は六十華嚴を指す。

卷数	行番号	仏典名	出拠
1	033	雑心論	『雜阿毘曇心論』(大正二八・八七〇中)
1	035	真諦訳撰論	真諦訳『撰大乘論世親釈』(大正三一・一五三下)
1	039	宝性論	『究竟一乘宝性論』(大正三一・八二三中)
1	041	大乘論	玄奘訳『撰大乘論無性釈』(大正三一・三八〇中)
1	042	撰大乘	玄奘訳『撰大乘論無性釈』(大正三一・三八〇中)
1	044	宝性論	『究竟一乘宝性論』(大正三一・八四六中)
1	046	勝鬘經	『勝鬘師子吼一乘大方便方広経』(大正一一・二二二上)
1	046	宝性論	『究竟一乘宝性論』(大正三一・八二三下)
1	046	金剛槃若論	『金剛般若波羅蜜経論』(大正二五・七九四上)
1	051	宝性論	『究竟一乘宝性論』(大正三一・八二五中)
1	053	勝鬘經	『勝鬘師子吼一乘大方便方広経』(大正一一・二二二上)
1	054	撰大乘論	
1	055	法華	『妙法蓮華経』(大正九・二〇中)
1	057	宝性論	『究竟一乘宝性論』(大正三一・八二四下)
1	061	成実論	『成実論』(大正三三・二四七中)
1	062	雑心論	『雜阿毘曇心論』(大正二八・八七〇中)
1	063	智度論	『大智度論』(大正二五・五七下)
1	072	涅槃經	『大般涅槃経』(大正一一・五八〇中)
1	074	真諦訳撰論	真諦訳『撰大乘論世親釈』(大正三一・一五三下)
1	126	稻稗喩經	
1	126	枯樹經	
1	127	涅槃經	
1	127	法華經	
1	129	縁起經	

卷数	行番号	仏典名	出拠
1	129	集宝論	
1	130	仏地經	
1	192	智度論	『大智度論』(大正二五・六三上)
1	220	智度論	『大智度論』(大正二五・六九中)
1	222	涅槃經	『大般涅槃經』(大正一二・四二八上)
1	223	報恩經	『大方便報恩經』(大正三・一五〇下)
1	227	智度論	『大智度論』(大正二五・二三〇上)
1	229	涅槃	『大般涅槃經』(大正一二・四五一中)
1	285	涅槃經	
1	285-286	智度論	
1	301	淨土論	『無量壽經優婆提舍願生偈』(大正二六・二三二上)
1	318	無垢称經	後述
1	359	無垢称經	後述
1	444	瑜伽	
1	451	瑜伽論	
1	453	瑜伽	
1	468	瑜伽	
1	469	瑜伽論	
1	480	瑜伽	
1	508	瑜伽	
1	554	楞伽經	『入楞伽經』(大正一六・五五九下)
1	562	真諦訳撰大乘	真諦訳『撰大乘論世親釈』(大正三一・一七五上)
1	565	撰大乘論	『撰大乘論』(大正三一・一一五下)
1	580	撰大乘論	『撰大乘論』(大正三一・一一五下)

1	592	瑜伽	『瑜伽師地論』(大正三〇・二九〇上)
1	665	撰大乘論	『撰大乘論』(大正三一・一一五下)
1	673	瑜伽等論	
1	681	瑜伽	
1	681	顯揚	
1	825	瑜伽	『瑜伽師地論』(大正三〇・五四三下)
1	826	瑜伽	『瑜伽師地論』(大正三〇・五四三下)
1	826	瑜伽	

11	247	維摩經	『維摩詰所說經』(大正一四・五四九中)
11	250		『維摩詰所說經』(大正一四・五四九中)
11	250		『維摩詰所說經』(大正一四・五四九中)
11	253	法華經	『妙法蓮華經』(大正九・七下)
11	254	楞伽經	『深密解脫經』の誤り(大正一六・六七一下)
11	256	善戒經	『菩薩地持經』の誤り(大正三〇・八八八上)
11	258	涅槃經	『大般涅槃經』(大正二二・五一八下)
11	268	俱舍論	『阿毘達磨俱舍論』(大正二九・二七三上)
11	270	俱舍論	『阿毘達磨俱舍論』(大正二九・二七三上)
11	272	善戒經種性品	『菩薩地持經』の誤り(大正三〇・八八八上)
11	273	成熟品	『菩薩地持經』の誤り(大正三〇・九〇〇上)
11	274	莊嚴論	『大乘莊嚴論』(大正三一・五九五上)
11	277	楞伽經	『楞伽阿跋多羅寶經』(大正一六・四八七上〜下)
11	287	瑜伽論	
11	287	声聞地	『瑜伽師地論』(大正三〇・三九五下)
11	289	獨覺地	『瑜伽師地論』(大正三〇・四七七下)

卷数	行番号	仏典名	出拠
11	295	菩薩地	『瑜伽師地論』(大正三〇・四七八下)
11	298	決択分	『瑜伽師地論』(大正三〇・七四九下)
11	301	菩薩地	『瑜伽師地論』(大正三〇・四七八下)
11	303	意地	『瑜伽師地論』(大正三〇・二八四上、中)
11	307	涅槃經	『大般涅槃經』(大正一二・五一八上)
11	311-312	涅槃經	
11	312	法華經	『妙法蓮華經』(大正九・五〇下)
11	315	宝性論	『究竟一乘宝性論』(大正三一・八二八中)
11	317	涅槃經	『大般涅槃經』(大正・五一八中、五一九上)
11	320-321	仏性論	『仏性論』(大正三一・七八七中)
11	322	法華經	『妙法蓮華經』(大正九・五〇下)
11	326		『妙法蓮華經』(大正九・五〇下)
11	327	宝性論	『究竟一乘宝性論』(大正三一・八一六上、中、八四〇下)
11	330	仏性論	『仏性論』(大正三一・七八七上)
11	334	涅槃經	『大般涅槃經』(大正一二・五八〇中)
11	336		『大般涅槃經』(大正一二・五八〇中)
11	337	法華經	『妙法蓮華經』(大正九・一二下)
11	339		『妙法蓮華經』(大正九・一四下)
11	343	涅槃經	『大般涅槃經』(大正一二・五二四下)
11	345	仏地經	『仏地經』(大正一六・七二一上)
11	346	仏地論	『仏地經論』(大正二六・三〇五中)
11	348	涅槃經	
11	371	涅槃經	『大般涅槃經』(大正一二・三六六上)
11	392	浄土論	『無量寿經優婆塞提舍願生偈』(大正二六・二三二上)

11	430	法華等	『妙法蓮華經』(大正九・一〇下)
11	434	瑜伽	『瑜伽師地論』(大正三〇・四〇二上)
11	436	瑜伽	『瑜伽師地論』(大正三〇・四〇二上)〔中〕
11	437	瑜伽	『瑜伽師地論』(大正三〇・四〇二中)
11	447	瑜伽	『瑜伽師地論』(大正三〇・四〇二下)
11	449	瑜伽	『瑜伽師地論』(大正三〇・四〇二下)
11	506	瑜伽論	
11	516	瑜伽論	
11	554	瑜伽論	『瑜伽師地論』(大正三〇・七四九上)
11	604	瑜伽論	不明 ⁽¹⁾
11	608	勝鬘經	『勝鬘師子吼一乘大方便方廣經』(大正二二・二二〇上)
11	675	法華	『妙法蓮華經』(大正九・三三下)
11	702	撰大乘論	玄奘訳『撰大乘論無性釈』(大正三一・四一九上)
11	754	瑜伽論	
11	754	解深密經	
11	777	華嚴經	『大方廣仏華嚴經』(大正九・五四五中)
11	778	瑜伽	『瑜伽師地論』(大正三〇・五四三中)
11	779	華嚴	『大方廣仏華嚴經』(大正九・五四五中)
11	780	瑜伽	『瑜伽師地論』(大正三〇・五四三中)
11	782	華嚴經	『大方廣仏華嚴經』(大正九・五四五中)
11	783	瑜伽論	『瑜伽師地論』(大正三〇・五四三中)
11	784	華嚴	『大方廣仏華嚴經』(大正九・五四五中)〔下〕
11	786	瑜伽	『瑜伽師地論』(大正三〇・五四三中)
11	787	華嚴	『大方廣仏華嚴經』(大正九・五四五下)
11	789	瑜伽	『瑜伽師地論』(大正三〇・五四三中)

卷数	行番号	仏典名	出拠
二	789-790	華嚴	『大方広仏華嚴經』(大正九・五四五下)
二	791	瑜伽	『瑜伽師地論』(大正三〇・五四三中)
二	792	華嚴	『大方広仏華嚴經』(大正九・五四五下)
二	794	瑜伽	『瑜伽師地論』(大正三〇・五四三中)下)
二	794	華嚴	『大方広仏華嚴經』(大正九・五四五下)
二	797	瑜伽	『瑜伽師地論』(大正三〇・五四三下)
二	798	華嚴	『大方広仏華嚴經』(大正九・五四五下)五四六上)
二	800	瑜伽	『瑜伽師地論』(大正三〇・五四三下)
二	801	華嚴	『大方広仏華嚴經』(大正九・五四六上)
二	803	瑜伽	『瑜伽師地論』(大正三〇・五四三下)

六	067	旧釈撰論	真諦訳『撰大乘論世親釈』(大正三一・二〇八下)
六	166	瑜伽	『瑜伽師地論』(大正三〇・五四三下)
六	184	撰大乘	
六	184	撰大乘	玄奘訳『撰大乘論無性釈』(大正三一・四二三中)下)
六	196-199		玄奘訳『撰大乘論世親釈』(大正三一・三五八上)
六	207	雑心	『雑阿毘曇心論』(大正二八・九〇〇中)
六	222	十二因縁論	『縁起論(縁起経釈)』 ⁽²⁾
六	238	瑜伽	
六	239	瑜伽論	『瑜伽師地論』(大正三〇・五八〇上)中)
六	250	撰大乘論	『撰大乘論』(大正三一・一一五下)
六	255	撰大乘論	
六	304	十二縁論	『縁起論(縁起経釈)』 ⁽³⁾
六	304-305	世親菩薩論	『縁起論(縁起経釈)』 ⁽⁴⁾

六	340	瑜伽	
六	351	撰大乘論	玄奘訳『撰大乘論本』(大正三一・一四九中)
六	398	対法論	『大乘阿毘達磨雜集論』(大正三一・七三四下〜七三五上)
六	435-436	撰大乘論	
六	440	涅槃經	
六	441	深密	『解深密經』(大正一六・七一〇下)
六	491	三乘同性經	『大乘同性經』(大正一六・六五二下)
六	492	三乘同性經	『大乘同性經』(大正一六・六五二下)
六	500	撰大乘論	
六	502	莊嚴論	
六	505	撰論	
六	506	撰大乘論	
六	512	讚仏論	
六	513	讚仏論	
六	513	三莊嚴論	
六	513-514	能断金剛波若論	
六	517	莊嚴論	
六	517-518	撰大乘	
六	519	撰大乘論	
六	521	莊嚴論	
六	528	撰大乘論	
六	532	涅槃經	『大般涅槃經』(大正一一・五九〇下〜五九一上)
六	537	莊嚴論	
六	537	莊嚴論	
六	539-540	莊嚴論	

卷数	行番号	仏典名	出拠
六	542	涅槃經	
六	543	莊嚴論	
六	619	華嚴經	
六	657	華嚴經	
六	657	華嚴	『大方広仏華嚴經』(大正九・六六三中)
六	659	華嚴	『大方広仏華嚴經』(大正九・六六三中)
六	661	華嚴	『大方広仏華嚴經』(大正九・六六三中)
六	666	華嚴	『大方広仏華嚴經』(大正九・六六三中)
六	669	華嚴	『大方広仏華嚴經』(大正九・六六三中)
六	672	華嚴	『大方広仏華嚴經』(大正九・六六三中)
六	673	華嚴	『大方広仏華嚴經』(大正九・六六三中)
六	674	華嚴	『大方広仏華嚴經』(大正九・六六三中)
六	675	華嚴	『大方広仏華嚴經』(大正九・六六三中)
六	676	華嚴	『大方広仏華嚴經』(大正九・六六三中)
六	679	華嚴經	

以上が『仏地経論疏』卷一・二・六に引用される仏典のすべてである。言うまでもなく、靖邁の『仏地経論疏』は玄奘訳『仏地経論』に対する注釈であるから、本疏の成立は貞観二十三年(六四九)十月三日から同年十一月二十四日にかけて訳出された『仏地経論』以降ということになる。^⑤

それでは、靖邁が『仏地経論疏』において用いた玄奘訳の仏典はどれほどの数にのぼるのであるか。というのも、『仏地経論疏』のなかに『仏地経論』以降の玄奘訳書が引用されていれば、それは本疏成立の上限年を確定する貴重な情報になるためである。前掲の図表に基づいて、玄奘が訳出した仏典を翻訳開始年月日の順に並べると以下のようになる。^⑥

・安慧菩薩糝『大乘阿毘達磨雜集論』一六卷
貞観二十年(六四六)正月十七日～同年三月二十九日

・弥勒菩薩説『瑜伽師地論』一〇〇卷

貞觀二十年五月十五日〜同二十二年(六四八)五月十五日

・無性菩薩造『撰大乘論釈』一〇卷

貞觀二十一年(六四七)三月一日〜同二十三年(六四八)六月十七日

・『解深密經』五卷

貞觀二十一年五月十八日〜同年七月十三日

・世親菩薩造『撰大乘論釈』一〇卷

貞觀二十二年十二月八日〜同二十三年六月十七日

・無著菩薩造『撰大乘論本』三卷

貞觀二十二年閏十二月二十六日〜同二十三年六月十七日

・親光菩薩等造『仏地經論』七卷

貞觀二十三年(六四九)十月三日〜同年十一月二十四日

ここに掲げた『大乘阿毘達磨雜集論』『瑜伽師地論』『撰大乘論無性釈』『解深密經』『撰大乘論世親釈』『撰大乘論本』は『仏地經論』以前に訳出されたものである。ゆえに、『仏地經論疏』にこれらの仏典が引用されていることは当然といえは当然である。けれども、『仏地經論疏』巻一において靖邁は、「無垢称経」に二度(長谷川ほか「二〇二〇」の328・329)触れている。もしも、これが玄奘訳『説無垢称経』(六五〇)からの引用であれば、靖邁による『仏地經論疏』の執筆が『説無垢称経』の訳出以後であることが確定するが、しかし「無垢称経」『説無垢称経』と見ることに疑問が挟まれる。

3 『仏地經論疏』に見られる「無垢称経」

第一に靖邁は、『仏地經論』の「若暫化作如是浄土、如是妙身、加衆令見、

応如余經分明顯説」(大正二六・二九二下)を「若暫化作、応如余無垢称経分明顯説。是仏足指按地所化」(長谷川ほか「二〇二〇」の327-328)と補って、「無垢称経」から「是れ仏足指按地の所化なり」との内容を読み取っている。これは、支謙訳『維摩詰經』の「於是仏即以足指按地」(大正一四・五二〇下)、鳩摩羅什訳『維摩詰所説經』の「於是仏以足指按地」(大正一四・五三八下)、玄奘訳『説無垢称経』の「爾時、世尊知諸大衆心懷猶予、便以足指按此大地」(大正一四・五六〇上)に相当するが、これだけの内容では靖邁がどの漢訳を用いたのかを判断することが出来ない。

第二に靖邁は、『仏地經論』の「七宝」(大正二六・二九三上)の第三「吠琉璃」について以下のような注釈を行なっている。すなわち、「吠琉璃」と名づくは、此是れは梵語なり。旧に直ちに『瑠璃』と言うは略なり。此の宝、最勝にして茲の土に無き所なり。法師の云わく、『此の中に称して瑠璃と為すは水精なり』と。故に『無垢称経』に「吠瑠璃を以て彼の水精に同ずること無かれ」と云うは、即ち其の事なり」(長谷川ほか「二〇二〇」の327-329)とある。問題は、この「無垢称経」をどのように考えるのかということである。『仏地經論疏』の文字列は、「無以吠瑠璃同彼水精」となるが、これと比較可能なものは、羅什訳の「無以琉璃同彼水精」(大正一四・五四〇下)と玄奘訳「勿以無伽吠琉璃宝同諸危脆賤水精珠」(大正一四・五六二下)の二つに限られる。しかし、ここから「吠」の字の有無を最大の論拠として、靖邁が玄奘訳を引用したと見るのはおそらく事実ではない。なぜならば、『仏地經論疏』の「無以吠瑠璃同彼水精」は『仏地經論』に説かれる「吠琉璃」を注釈したものであるため、羅什訳の「琉璃」を「吠琉璃」と表記することに問題は生じないからである。ゆえに、本文一致の状況から見て、靖邁は羅什訳

『維摩詰所説經』を引用したと考えるべきであろう。また、『維摩詰所説經』からの引用であるにも関わらず、靖邁が「無垢称経」と記していることにも問題は無い。というのも、『注維摩詰經』の道生(三五五頃―四三四) 釈には「維摩詰とは此には無垢称と云うなり」(大正三八・三二七下)、浄影寺慧遠(五二二―五九二)の『維摩義記』には「維摩詰とは(中略)義に随いて傍翻すれば無垢称と名づく」(大正三八・四二二下)とあり、智顛(五三八―五九七)や吉藏(五四九―六二三)においても維摩詰を無垢称と呼ぶ先例があるためである。^⑧靖邁(『般若心経疏』)が鳩摩羅什をはじめ、僧肇(三七四/三八四―四一四)や智顛、そして吉藏の思想に精通していたとする林香奈氏の指摘がこれを傍証するであろう。^⑨

4 おわりに

このように考えてくると、靖邁『仏地経論疏』に言及される「無垢称経」は、玄奘訳『説無垢称経』ではなく、鳩摩羅什訳『維摩詰所説經』と見るべきである。かかる検討に誤りがないとすれば、『仏地経論疏』は『仏地経論』の訳出(六四九)からそれほどの年月を経過せず執筆されたのではないか。けれども、本稿では『仏地経論疏』に見られる「無垢称経」という記述に注目し考察を加えただけである。今後は『仏地経論』以降に訳出された玄奘訳の仏典が『仏地経論疏』に引用されていないという事実を、真諦(四九九―五六九)訳『阿毘達磨俱舍釈論』との関係から追求する予定である。筆者自身の今後の研究課題としたい。

註

- (1) 『仏地経論疏』卷二「故瑜伽論云有漏善惡業是有報無漏は無報」(長谷川ほか「110111」の604-605「卷11」)。
- (2) 『仏地経論疏』卷六には、「三藏云此師依世親菩薩十二因縁論云無明遍通三性。故作此釈」(長谷川ほか「110111」の221-222「卷六」)とあるが、同様の記事は、基(六三三―六八二)の『成唯識論述記』(大正四三・二中)や『瑜伽師地論略纂』(大正四三・九二中)、道倫(遁倫。生没年不詳)の『瑜伽論記』(大正四二・四〇九下)、湛慧(一六七六―一七四七)の『成唯識論述記集成編』(大正六七・五五二上)などにも見られる。とくに、基『成唯識論述記』の当該箇所については、松田和信『成唯識論述記』の伝える世親『縁起論』について、『印仏研』三五(一)、一九八六年)が詳しい。
- (3) 『仏地経論疏』卷六には、「第三故所知障下釈通世親菩薩十二縁論無明支通三性」(長谷川ほか「110111」の304「卷六」)とある。詳しくは脚注(2)を参照。
- (4) 『仏地経論疏』卷六には、「所以世親菩薩論説無明支通三性者非是无明」(長谷川ほか「110111」の304-305「卷六」)とある。詳しくは脚注(2)を参照。
- (5) 智昇『開元釈教録』卷八(大正五五・五五六中)。
- (6) 玄奘が翻訳した仏典名をはじめ、翻訳年月日や翻訳場所などの情報については、吉村誠『中国唯識思想史研究―玄奘と唯識学派―』(大蔵出版、二〇一三年、二二〇―二二二頁)、吉村誠・加藤朝胤・大谷徹奘編『玄奘三蔵と薬師寺』(法相宗大本山薬師寺、二〇一五年、六〇―六一頁)、吉村誠「玄奘の求法と伝法―唯識思想を中心に―」(佐久間秀範・近本謙介・本井牧子編『玄奘三蔵―新たな玄奘像をもとめて―』所収、勉誠出版、二〇二一年、一四二―一四三頁)を参照。
- (7) 「無垢称経」の引用を「法師云」に含めるべきではない。なぜならば、『仏地経論疏』において「即其事也」と記述する場合は、すべて靖邁の釈(長谷川ほか「110110」の223、長谷川ほか「110111」の628「卷六」)に帰せられるからである。

(8) 智顛の『四教義』には「円教の位に約して淨無垢称の義を积せば、維摩大士は…後略」(大正四六・七六五中など)、吉蔵の『勝鬘宝窟』(大正三七・二下)には「維摩を無垢称と云う」などある。

(9) 林香奈「靖邁『般若心経疏』の成立について」(『東洋学研究』五一、二〇一四年)。

(村上明也)

二 靖邁の学系と玄奘門下における『仏地経論疏』

1 はじめに

本稿では、靖邁『仏地経論疏』の本文と並行関係が見られる文献を指摘することで、靖邁がどのような学系に連なる人物であったのかを推測するとともに、『仏地経論疏』が靖邁と同時代の玄奘門下の中で参照されていた可能性を示唆する一例を示したい。

2 地論宗文献との並行関係

靖邁の『仏地経論疏』には、地論学派の淨影寺慧遠の著作を参照していることが明らかな箇所が存在する。一例を挙げれば、『仏地経論疏』巻一で「仏」の語を譬喩を用いて注釈する一段に、慧遠の『無量寿経義疏』『観無量寿経義疏』『大般涅槃経義記』『維摩義記』『大乘義章』で用いられる譬喩と
の一致を確認することができる。『仏地経論疏』巻一の当該箇所を示せば、
下記の通りである。

五借喩弁覚者、無知昏寢、事等如睡。聖恵一起、朗然大悟、如睡夢覚。
故称为覚。煩惱染穢、能覆聖智、不令顕發、聖恵一起、朗照斯徹、染穢
無能。有似蓮花。在於濁水、所障不得開敷、若出濁水、開敷顕曜、濁水
無能。故言如蓮花開。上來別解覚義訖。

(長谷川ほか [二〇一〇] の 98-102)

他方、慧遠の『無量寿経義疏』には「仏」の語を注釈する中で「無明眠寢、

事等如睡。聖慧一起、朗然大悟、如睡得悟。故名爲覺」(大正三七・九一下)とあり、それぞれの文献でやや文言は異なるものの、『観無量寿経義疏』などにも同様の譬喩を用いて「仏」の語が注釈されている。^①

さらに、慧遠の著作との関係についていえば、『仏地経論疏』巻一には「経」の語を解釈する中で、經典の名称の由来には喩・事・人・法、法と喩、人と法に基づくことを述べているが、こうした分類も既に慧遠の『無量寿経義疏』や『維摩経義記』巻一本に見られるものである。^{②③}

ところで、『仏地経論疏』と地論宗文献との関連は、慧遠の著作に限られるものではない。『仏地経論疏』が注釈に用いる用語には、菩提流支(？―五〇八―五三五―?)の講義録とされる『金剛仙論』との近似が認められるのである。^④『仏地経論疏』巻一には、以下のようにある。

自下、第三略举宗趣、以撰勝義分。文中有四。初総許略明宗所撰義。二「謂顯世尊」下、正明略弁宗所撰義。第三「此則次第」下、明宗所撰義依経次第而顯。第四「如是処」下、重更属当。

(長谷川ほか [110110] の 130-133)

ここには、「属当」という見慣れない用語が用いられるが、『金剛仙論』では、巻一の『「此句顯有爲虚妄故」者、此是論主属当『凡所有相』等経之与論也』(大正二五・八一―下)など、「属当」の語の用例が複数見られる。これらの用例は、『金剛般若波羅蜜経論』の〇〇との本文は『金剛般若経』の〇〇の経文にことよせるものである」といった意である。

以上のように、靖邁の『仏地経論疏』には地論宗文献との関連を示唆する箇所が存在し、靖邁が地論学派の学系に連なる人物であったことを予測させるのである。

3 慧観『薬師経疏』との並行関係

靖邁の『仏地経論疏』と並行関係を持つ文献の中で特に注目されるものに、唯識六家の一人にも数えられる慧観(生没年不詳)が六八五年から七〇〇年頃の間に著したと推定される『薬師経疏』がある。^⑤

『仏地経論疏』巻二には「戒善清浄」の語を注釈して、

自下第五、解「戒善清浄」。文中有三。初明具足六支名戒善清浄。六支者、一住浄尸羅。『瑜伽』名爲安住具戒。「謂於所受学処、身業語業(無缺)無穿、名安住具戒」。二善自防守別解律儀。『瑜伽』云、「謂能守護七衆所受別解脫律儀。今此義中唯依苾芻律儀処、説善能守護別解脫律儀」。三軌則具足。『瑜伽』云、「軌則円満。謂於威儀路。或所作事。或善品加行処所、成就軌則。随順世間不越世間、随順毘奈耶不越毘奈耶。云何名爲於威儀路。成就軌則。随順世間乃至不越毘奈耶。謂於所応行、即於此中如是而行、由不爲世間之所譏毀。不爲賢良善士。諸持律者之所呵責。如行既然。於住坐臥亦爾。云何名爲於所作事成就軌則、乃至不越毘奈耶。謂於所作、若衣服事、或盥鉢事等、諸所応作、即如是作、不爲世間譏毀、乃至持律之所呵責。云何名爲於諸善品加行処所、成就軌則。随順世間、乃至不越毘奈耶。謂受持誦修敬師告宣白請問繫念思惟、如是種々善品加行如所応作、即如是作不爲世間譏毀、乃至持律之所呵責。応知、説名規則円満」。

(長谷川ほか [110110] の 434-447 [巻11])

と述べる箇所が存在する。このうち、「三軌則具足」の「瑜伽云」について注目すると、以下に傍線を示した通り、玄奘訳『瑜伽師地論』巻二二「本地

分中声聞地第十三初瑜伽処出離地第三之一」を要約して引用していることが分かる。

云何名為軌則円満。謂、如有一或於威儀路。或於所作事。或於善品加行処所。成就軌則。隨順世間不越世間、隨順毘奈耶不越毘奈耶。云何名為於威儀路。成就軌則。隨順世間不越世間。隨順毘奈耶不越毘奈耶。謂如有一於所應行於如所行。即於此中如是而行。由是行故不為世間之所譏毀。不為賢良正至善士。諸同法者、諸持律者、諸學律者之所呵責。如於所行於其所住所坐所臥當知亦爾。如是名為於威儀路成就軌則。隨順世間不越世間隨順毘奈耶不越毘奈耶。云何名為於所作事成就軌則。隨順世間不越世間、隨順毘奈耶不越毘奈耶。謂如有一於其所作。若衣服事、若便利事、若用水事若楊枝事、若入聚落行乞食事、若受用事、若盥鉢事、若安置事、若洗足事、若為敷設臥具等事、即此略說。衣事鉢事、復有所余。如是等類所應作名所作事。如其所應於所應作於如所作。即於此中如是而作。由是作故不為世間之所譏毀。不為賢良正至善士。諸同法者、諸持律者、諸學律者之所呵責。如是名為於所作事成就軌則。隨順世間不越世間。隨順毘奈耶不越毘奈耶。云何名為於諸善品加行処所成就軌則。隨順世間不越世間、隨順毘奈耶不越毘奈耶。謂於種種善品加行。若於正法受持誦誦。若於尊長修和敬業參覲承事。若於病者起慈悲心殷重供侍。若於如法宣白加行。住慈悲心展轉與欲。若於正法請問聽受勸無墮。於諸有智同梵行者。尽其身力而修敬事。於他善品常勤讚勵。常樂為他宣說正法。入於靜室結跏趺坐繫念思惟。如是等類諸余無量所修善法。皆說名為善品加行。彼於如是隨所宣說善品加行。如其所應於所應作於如所作。即於此中如是而作。由是作故不為世間之所譏毀。不為賢良正至善士。諸同法者、諸持

律者、諸學律者之所呵責。如是名為於諸善品加行処所。成就軌則。隨順世間不越世間。隨順毘奈耶不越毘奈耶。若於如是所說行相軌則差別悉皆具足。応知、説名軌則円満。

(大正三〇・四〇二中)

一方、慧觀の『業師経疏』について見てみると、破戒を説く文脈で『瑜伽論』を要約して次のように述べられている。

經。「復次」至「破於正見」。二、治破戒文分為八。一常虧清禁。二不願多聞。三恃已陵他。四縁茲遇難。五殃神長劫。六由昔聞名。七願遂応時。八勤修勝業。此到初也。謂、先於如來法中白四羯磨受別解脱戒名受持學問。「破戒」者、新翻名尸羅、旧訳為清涼。謂、身語業有欠有穿名為破戒。「破行」者、依『瑜伽論』二十二説。謂威儀路、戒所作事、或善品加行処所、不成就軌則。不隨順世間違越世間、不隨順毘奈耶違越毘奈耶。云何名為於威儀路不成就軌則、乃至違越毘奈耶。謂、所不應行即如是行。為諸世間之所譏毀、亦為貞良善士。謂、持律者之所呵責。如行既然。於行住坐臥亦爾。云何名為於所作事不成就軌則、乃至違越毘奈耶。謂於所作、若衣服事、或盥鉢事等、諸所不應作、即如是作、為諸世間之所譏毀。亦為貞良善士。謂持律者之所呵責。云何名為於諸善品加行処所不成就軌則。乃至違越毘奈耶。謂、受持誦誦、修敬師長、宣白請問、繫念思惟、種種善品。非加行中所不應作。即如是作、為諸世間之所譏毀亦為貞良善士。謂持律者之所呵責。如是名為而破於行。「破於正見」者：

(大正八五・三一三上)

上記のうち、波線部は引用元の『瑜伽論』を大幅に要約して引用していることが確認できるが、その要約の仕方は『仏地経論疏』巻二と軌を一にして

いる。

以上のことから、靖邁『仏地経論疏』と慧観『薬師経疏』には、どちらかがどちらかを参照したことが予想される。しかし、『仏地経論疏』と『薬師経疏』に見られる『瑜伽論』の要約の一致については、靖邁と慧観に先行する第三者の著作を共通して参照している可能性や、現在は散逸している靖邁の『薬師経疏』を慧観が参照した可能性なども想定しておかねばならない。これについては今後の研究課題としたい。

4 おわりに

靖邁の『仏地経論疏』には、淨影寺慧遠の著作を参照した形跡や、玄奘門下で同時代の慧観が著した『薬師経疏』と並行関係が認められる。しかしながら、本稿の検討のみをもって、靖邁がどのような学系に連なる人物であるのかを早急に結論づけることはできない。『仏地経論疏』が玄奘門下の中で参照されていたのかという問題についても同様である。もっと言えば、『仏地経論疏』には本稿で取り上げた慧遠の著作と慧観『薬師経疏』以外にも並行関係が認められる文献が存在するのではないか。今後、そうした文献の検出を通じて検討を深めていきたい。

註

- (1) 慧遠『観無量寿経義疏』には「無明昏寢、事等如睡。聖慧一起、朗然大悟、如睡得寤、故名為覺」(大正三七・一七三中)とある。
- (2) 『仏地経論疏』巻一には「第四『依所詮義』下、釈経得名所由。然諸経得名種々不同。或從諭得名、如『稻稈諭経』。或從事彰目、如『枯樹経』。或從人受称、

如『須大拏経』。或從法為号、如『涅槃経』。或法諭双举、如『法華経』。或人法並彰、如『勝鬘経』。或就所詮為号、即如此経。下借二事類而顕之。『如縁起経』者、謂詮十二縁起名縁起経。『如集宝論』者、詮集宝方法名『集宝論』。此経亦爾。詮仏地功德名『仏地経』也」(長谷川ほか[1010]の124-130)とある。

(3) 慧遠『維摩義記』巻一本には「但諸経立名不同乃有多種。或就法為名、如『涅槃経』『波若経』等。或就人為目、如『薩和檀』『須達拏』等。或就事立称、如『枯稻芋経』等。或就諭彰名、如『大雲経』『宝篋経』等。或人法並彰、如『勝鬘経』等。或事法双举、如彼『方等大集経』等。或法諭俱題、『華嚴経』『法華経』。或人事双立、如『舍利弗問疾経』等。如是非一」(大正三八・四二一下)とあり、『無量寿経義疏』には「但彼諸経得名不同。或但就法、如『涅槃』等。或唯就人、如『提謂経』『太子経』等。或单就事、如『枯樹経』等。或偏就諭、『大雲経』『宝篋経』等。或有就時、如『時非時経』。或就処所、如『楞伽経』『伽耶山頂経』等。或人法双題、如『維摩経』『勝鬘経』等。或事法並举、如彼『方等大集経』等。或法諭並彰、如『華嚴』『法華経』等。或人法双举。如『舍利子問疾経』等。如是非一」(大正三七・九一中)とある。

(4) 『金剛仙論』については、大竹晋「金剛仙論の成立問題」(『仏教史学研究』四四(一)、二〇〇一年)などを参照。

(5) 慧観『薬師経疏』については、長尾光恵「唐代初期仏教における薬師信仰と弥陀信仰の交渉について」(『仏教文化学会紀要』二八、二〇一九年)を参照。

(小野嶋祥雄)

三 『仏地経論疏』に見られる因明について

1 はじめに

靖邁の『仏地経論疏』には、『仏地経論』の説を因明の三支（宗・因・喩）に整理して解釈する例が散見される。因明は、玄奘によって『因明正理門論』『因明入正理論』が翻訳されて以降、唯識学派の人びとを中心に研鑽が深められており、靖邁の『仏地経論疏』もその流れの中に位置づけられるものと考えられる。この点については、今後、他師の解釈との比較を通して検討していく必要があるが、本稿では、その手始めとして『仏地経論疏』における因明の用例について確認しておきたい。

2 『仏地経』の会座に関する注釈

『仏地経論』巻一には、『仏地経』の会座である「大宮殿」について、次のような解釈が示されている。

如是浄土分量円満、為三界处、為不爾耶。「超過三界所行之处」、謂、大宮殿处所方域、超過三界所行之处。非如三界自地諸愛執為己有、所縁相应二縛随増。是彼異熟及増上果。如是浄土、非三界愛所執受故、離二縛故、非彼異熟増上果故、如涅槃等。超過三界異熟果地。

（大正二六・二九三中）

『仏地経』は、本経の会座である「大宮殿」について、これが「三界の所行之处を超過」（大正一六・七二〇中）した处であると説く。このことについて

て『仏地経論』は、「愛執によって形成される处ではない」「所縁縛と相应縛の二縛を離れている」「異熟果・増上果によって受ける处ではない」という三点を挙げ、「大宮殿」は涅槃と同様、三界を超過した处であると解釈するのである。

この『仏地経論』の解釈に対して、『仏地経論疏』巻一では以下のように注釈する。

此文中得作宗因喩。宗云三界是愛所行处因云所縁相应二縛随増故同法喩云如彼能感異熟果法。

（長谷川ほか〔二〇二〇〕の432-434）

此の文の中に宗・因・喩を作すことを得。宗に云わく、三界は是れ愛の所行の处なるべし。因に云わく、所縁と相应の二縛の随増なるが故に。同法喩に云わく、彼の能感の異熟果の法の如し。

ここでは、『仏地経論』の説が宗（主張）・因（理由）・喩（喩例）の三支の形式に整理されている。いま、その三支を示せば以下のものである。

〔宗〕三界は是れ愛の所行の处なるべし。

〔因〕所縁と相应の二縛の随増なるが故に。

〔喩〕彼の能感の異熟果の法の如し。

『仏地経論疏』は、先の『仏地経論』の説を承けて、「三界は愛執によって形成される处である」と主張（宗）する。そして、その理由（因）を「所縁縛と相应縛の二縛の随増によるものであるから」といい、その上で「二縛の随増であれば、愛執によって形成される处である。」能感の異熟果のよう「に」として喩例（喩）を示しているのである。

これに続いて、「大宮殿」についても、以下のように三支を用いた注釈が

なされている。

四明非成超中云有宗因喩宗云如是淨土超過三界所行之処因云非自地愛所執愛故又離所緣相応二縛隨増故亦非彼内報異熟果及外報増上果故聞法喩云如涅槃等。

(長谷川ほか [110110] の 434-437、() 内は筆者)

四に非成超を明かす中に云わく、宗・因・喩有り。宗に云わく、是の如き淨土は三界の所行を超過するの処なるべし。因に云わく、自地の愛の所執の受には非ざるが故に。又た、所縁と相応の二縛の隨増を離るるが故に。亦た、彼の内報の異熟果と及び外報の増上果とは非ざるが故に。同法喩に云わく、涅槃等の如し。

ここでは、淨土、つまり「大宮殿」が「三界を超過した処である」ことが主張(宗)されており、その理由(因)として「愛執によって受ける処ではないから」「二縛の隨増を離れているから」「内報の異熟果でも外報の増上果でもないから」という三点が挙げられている。その上で、「愛執によって受けるものではない処、二縛の隨増を離れた処、異熟果でも増上果でもない処は、三界を超過した処である。」涅槃等のように」として喩例(喩)が示されている。この三支を別出すれば、次のようになろう。

〔宗〕 是の如きの淨土は三界の所行を超過するの処なるべし。

〔因①〕 自地の愛の所執の受には非ざるが故に。

〔因②〕 所縁と相応の二縛の隨増を離るるが故に。

〔因③〕 彼の内報の異熟果と及び外報の増上果とは非ざるが故に。

〔喩〕 涅槃等の如し。

さて、以下に示すように、この宗・因・喩は先の『仏地經論』卷一の説を、

そのまま三支の形式に整理したものとなっている。

如是淨土分量円満、為三界処、為不爾耶。「超過三界所行之処」、謂、(宗) 大宮殿処所方域、超過三界所行之処。非如三界自地諸愛執為己有、所縁相応二縛隨増。是彼異熟及増上果。如是淨土、(因①) 非三界愛所執受故、(因②) 離二縛故、(因③) 非彼異熟増上果故、(喩) 如涅槃等。超過三界異熟果地。

(大正二六・二九三中、() 内は筆者)

つまり、『仏地經論』自体には明確な形で三支が示されているわけではないものの、靖邁はこれを宗・因・喩に整理し、もって論意を明確にせんとしているのである。

3 『仏地經論疏』に見られる論説の整理

このような『仏地經論疏』の傾向が顕著なものを、今一つ例示しておきたい。『仏地經論疏』卷一には以下の注釈が見られる。

二若爾下問答重成就立理通難中有四初先立宗淨土定心所變雖有色等似十界相非十界撰淨土定心所變是有法雖有色等乃至非十界撰是法々及有法不相離故名宗……二立因云非諸世間五識所得故以此定境所現十色是法界收雖は無漏意識所証故非世間凡夫二乘五識所得三聞法喩云如遍処等所縁青等。

(長谷川ほか [110110] の 457-467)

二に「若爾」の下は、問答して重ねて立理・通難を成就す。中に四有り。初めに先ず宗を立つ。「淨土は定心の所變にして、色等の有ること十界の相に似ると雖も十界の撰には非ず」と。「淨土定心所變(淨土は定心の

所変にして」というは是れ有法なり。「雖有色等乃至非十界撰（色等の有ること十界の相に似ると雖も、十界の撰には非ず）」というは是れ法なり。法と及び有法と不相離なるが故に宗と名づく。……二に因を立てて云はく、「諸の世間の五識の所得に非ざるが故に」と。此れ定境所現の十色を以て是の法界に収む。是れ、無漏の意識の証する所なるが故にと雖も、世間の凡夫・二乗の五識の所得には非ず。三には同法喩に云はく、「遍処等の所縁の青等の如し」と。

ここでは『仏地経論』の説が、

〔宗〕浄土は定心の所変にして、色等の有ること十界の相に似ると雖も十界の撰には非ず。

〔因〕諸の世間の五識の所得に非ざるが故に。

〔喩〕遍処等の所縁の青等の如し。

という三支に整理されているが、これは『仏地経論』巻一の以下の説に対する注釈である。

有義、(宗) 浄土定心所変、雖有色等似、十界相非十界撰。(因) 非諸世

間五識所得、(喩) 如遍処等所縁青等。皆是自在所生色故、法界所撰。

是故、浄土雖用色等為其体性、是无漏善亦不相違。若爾、菩薩五識不縁受用土耶。雖依彼力自識變異、然相麁妙不相似故、非五境撰。

(大正二六・二九三下、() 内は筆者)

この箇所も先と同様、『仏地経論』自体に明確な三支が示されているわけではないが、靖邁は、ここに宗・因・喩を明示することで、その論意を整理している。また、宗の「浄土は定心の所変にして、色等の有ること十界の相に似ると雖も十界の撰には非ず」について、その有法(≡宗の前陳)と法

(≡宗の後陳)の区分を明示し、「法と及び有法と不相離なるが故に宗と名づく」と述べる点などは、玄奘訳の『因明正理門論』を踏まえたものと考えられる。

4 今後の課題

ところで、『仏地経論』には、わずか一箇所のみではあるが、巻六に「因明論」という語が用いられている。

如実義者、彼「因明論」立自・共相、与此少異。彼説一切法上実義皆名自相。以諸法上自相共相、各附己体、不共他故。若分別心立一種類能詮・所詮、通在諸法、如縷貫花。名為共相。此要散心分別仮立。是比量境。一切定心離此分別、皆名現量。

(大正二六・三一八中)

如実義とは、彼の「因明の論」に、自・共の相を立つること、此れと少しく異なれり。彼は一切法の上の実義を説きて皆な自相と名づく。諸法の上の自相と共相とは、各の己体に附して、他とは共ならざるを以ての故なり。若し分別心の一種類の能詮・所詮を立つれば、通じて諸法に在ること、縷もて花を貫くが如し。名づけて共相と為す。此れは要ず散心にて分別仮立す。是れ比量の境なり。一切の定心は此の分別を離れ、皆な現量と名づく。

これは、『仏地経論』の「又た世界は大小輪山の圍繞する所なるが如く、是の如く、如来の妙觀察智は、愚ならざる一切の自相と共相の圍繞する所なり」(大正一六・七二二中)という説に対するものである。『仏地経論』では、『仏地経論』のいう自相・共相と、「因明の論」のいう自相・共相との相違につ

いて、『仏地経』は、個別独自の相を「自相」、自相の有する他と共通する相を「共相」と説くが、「因明の論」では、「一切法の上の実義」を「自相」、分別心によって立てられる能詮・所詮といった関係が諸法にも共通することを「共相」と説くという。その上で、「一切の定心は此の分別を離れ、皆な現量と名づく」、つまり、定心においてはあるがままに自体を観察し、共相による推量（比量）を必要としないため、一切を現量ということができると解釈しているのである。この箇所に対する『仏地経論疏』の注釈が見当たらないため明言はできないが、『仏地経論』自体に因明に関する言説が確認されることは、『仏地経論疏』がその注釈に際して因明の論法を用いていることと無関係ではないように思われる。いずれにせよ、『仏地経論』の説を三支に整理することで論意を明瞭にしようとする傾向は、『仏地経論疏』の注釈の一特徴ということができるとあり、今後、さらに用例を検出しその分析を進める必要がある。

（吉田慈順）

四 靖邁『仏地経論疏』の「三蔵云」について

1 「三蔵云」について

靖邁『仏地経論疏』巻一・二・六には、「三蔵云」とのみ記して、玄奘の口述と推測される文言が少なくとも四カ所ある。靖邁は『般若波羅蜜多心経疏』でも一カ所「三蔵云」（新纂統蔵二六・六〇〇中）と記す例があるので、靖邁の著述の一傾向と見て差し支えないだろう。

ただし、玄奘の口述と推測される文言を「三蔵云」として引用する事例は他にもある。玄奘や玄奘の弟子（例えば基）と同年代の事例をあげると以下のようになる。

まず、玄奘と同年代の事例としては、道宣（五九六―六六七）と円測（六一三―六九六）、少し遅れるが、法宝（六二七頃―七〇六―七二〇頃）があげられる。

道宣は『四分律刪繁補闕行事鈔』において、玄奘の口述とされる文言について「翻経三蔵云」と記しており、これが一カ所みられる。

円測は『解深密経疏』において、主に「真諦三蔵云」と対比する形で「大唐三蔵云」と表記する。これが六カ所ある。この「大唐三蔵」は法宝も用いており、『一乗仏性究竟論』に一カ所「大唐三蔵釈云」（巻五・247）浅田正博「新資料・法宝撰『一乗仏性究竟論』巻第四・巻第五の両巻について」『仏教文化研究所紀要』二五、一九八六年）とある。

また、円測は『仁王経疏』では「慈恩三蔵云」と記しており、これが二カ

所ある。なお、不空(七〇五―七七四)の訳場に参加した良賁(七一七―七七七)の『仁王護国般若波羅蜜多經疏』や法崇『仏頂尊勝陀羅尼經教跡義記』(八〇〇年頃)は、この「慈恩三藏」を継承している。

このように玄奘と同年代の道宣と円測、法宝においては、「真諦三藏」などの他の三藏と区別するため、「〇〇三藏」とする傾向が見られる。

次に、玄奘門下と同年代の事例としては、法藏(六四三―七一二)と慧沼(六四八か六五〇―七一四)、少し遅れるが通倫(道倫。六六〇―七三〇頃、六五〇―六七〇年との説もある)があげられる。

法藏は『華嚴經探玄記』卷一二と『大乘法界無差別論疏』においてそれぞれ一カ所、慧沼は『成唯識論了義灯』において二カ所、「三藏云」と記している。

通倫『瑜伽論記』では「三藏云」が頻出する。ちなみに、少し時代は下るが大賢(大賢。?―七五三―七七四?)『成唯識論字記』も「三藏云」を頻繁に用いる。

このように玄奘門下と同年代では、「三藏」、他の三藏は「〇〇三藏」と記す傾向が見られる。よって、玄奘を「三藏」とのみ記す靖邁は、この場合、玄奘門下と同年代に分類される。

2 『仏地経論疏』卷一・二・六の「三藏云」の事例

先にも述べたように、靖邁『仏地経論疏』卷一・二・六には、「三藏云」と記す事例が四カ所ある。

①煩悩為「二縛随増」。旧云縁使、相应使。三藏云、梵語令無此名使者自是種子義。今弁二随増乃是現起故、不取旧名也。

(長谷川ほか [110110] の 429-430)
②本有始熏。三藏云、印度諸師有三説不同。一護月菩薩等師相承云：(以下、「二護法菩薩等…三勝軍居士等…」)
(長谷川ほか [110110] の 553)

③三藏云、此師依世親菩薩十二因縁論云無明遍通三性。故作此釈。

(長谷川ほか [110111] の 221-222 [卷六])

④二讚仏論説、如来法身無生滅故。三藏云、讚仏論は無着菩薩造。

(長谷川ほか [110111] の 512-513 [卷六])

このうち①は梵語に対する従来の訳の修正、②はインド諸師の学説の列挙、③④は『仏地経論』本文の論拠となる具体的な著者と著者名をその内容としている。

ここでは④の「讚仏論は無着菩薩造」に注目してみたい。なぜなら玄奘や玄奘門下と同年代の人物の著作で、その実態が不明な「讚仏論」について、具体的な著者名を「無着菩薩造」と記すのは、靖邁のみだからである。

3 「無着」造『讚仏論』

玄奘が自らの訳書中で『讚仏論』に言及するのは、親光菩薩等造『仏地経論』(六四九年十一月二十四日訳出)と最勝子等諸菩薩造『瑜伽師地論釈』(六五〇年二月一日訳出)の以下の部分である。どちらも合採訳であるが、具体的な著者名は記されていない。

①親光菩薩等造『仏地経論』卷七(大正二六・三三六上)

有義初一撰自性身。四智自性相应共有。及為地上菩薩所現一分細相、撰受用身。若為地前諸菩薩等所現一分麁相化用、撰变化身。諸經皆説、清

淨真如為法身故。讚仏論說、如來法身無生滅故。莊嚴論說、仏自性身本性常故。

②最勝子等諸菩薩造『瑜伽師地論積』（大正三〇・八八四下）

讚仏論說、三身三德皆是瑜伽。一切果徳不相離故。

これら『讚仏論』に言及する部分は、玄奘が論文に対して自説を展開するにあたり、複数の典拠を引いて、いわば会通的に論証する部分にあたる。なお、①は先に靖邁が「三蔵云讚仏論は無著菩薩造」としていた部分と対応する。

この玄奘が指示する『讚仏論』を受けて、円測『仏説般若波羅蜜多心経賛』や基『成唯識論述記』『大乘法苑義林章』『大乘阿毘達磨雜集論述記』、多くの「三蔵云」を引用する遁倫『瑜伽論記』も『讚仏論』を引くが、著者名は記されていない。ちなみに智周（六七七―七三三）『大乘入道次第』も同様である。

例えば、基『大乘法苑義林章』卷七（大正四五・三五九下）では、

讚仏論說。仏自性身無生滅故。無著金剛般若論說。受持演說彼経功德。と述べ、『讚仏論』の著者には言及せず、次の『金剛般若論』には「無著」を付している。

このように、玄奘や玄奘門下と同年代の人物の著作の中で、『讚仏論』の著者を「三蔵云」として「無著菩薩造」と具体的に示すのは、靖邁『仏地経論疏』だけということになる。

ちなみに、玄奘の口述と推測される「三蔵云」として『讚仏論』の著者を「無著」とする靖邁『仏地経論疏』の影響がみられるのは、おそらく靖邁と直接接触することはなかった如理（智周の弟子）『成唯識論疏義演』と、太賢

『成唯識論學記』である。ただし、いずれも「三蔵云」とは明記しない。

・如理集『成唯識論疏義演』卷一三本（新纂統蔵四九・八九七中）

仏地云讚仏論說者、如仏地第七引、讚仏論証仏法身無生無過。其讚仏論

は無著所造。

・太賢集『成唯識論學記』卷七（新纂統蔵五〇・一二六上）

無著所造讚仏論云、法身無生滅故。解深密亦爾。世親金剛般若論云、証因得故。撰大乘云、諸仏所依法身無別。仏地経云、猶若虚空。

4 今後の課題

これまで靖邁『仏地経論疏』の「三蔵云」について見てきた。玄奘を「三蔵」とのみ記す靖邁は、玄奘門下と同年代に分類できるが、「三蔵云」や他の指示（例えば「奘曰」「遍学三蔵」など）のもとに記される玄奘の口述内容の分析や諸師の相関なども検証する必要がある。さらに新発見の書や逸文なども調査する必要があるだろう。このように玄奘の口述の抽出が進めば、玄奘の口述であるにも関わらず「三蔵云」等と記さずに、自らの著作に反映している諸師の意図や、玄奘の教学の特徴がより明確になると思われる。

また、玄奘や玄奘門下と同年代で、靖邁のみが「三蔵云」として『讚仏論』の著者を「無著」としていること、加えて玄奘の口述や靖邁『仏地経論疏』を同時代的に知り得た諸師が『讚仏論』の著者を記さない理由、『讚仏論』の著者を「無著（無著）」とする記述が、後（おそらく靖邁没後）になって再度現れる背景なども今後の課題となる。

（長谷川岳史）